

# Mon Nara



Numéro303 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会

OCT. 2023 10 月号

## 秋の教養講座 2023

### 講演『牛を描いて 50 年一生きる喜びを世界へ伝えたい』

11月23日（木・祝）生駒市コミュニティーセンターにて開催

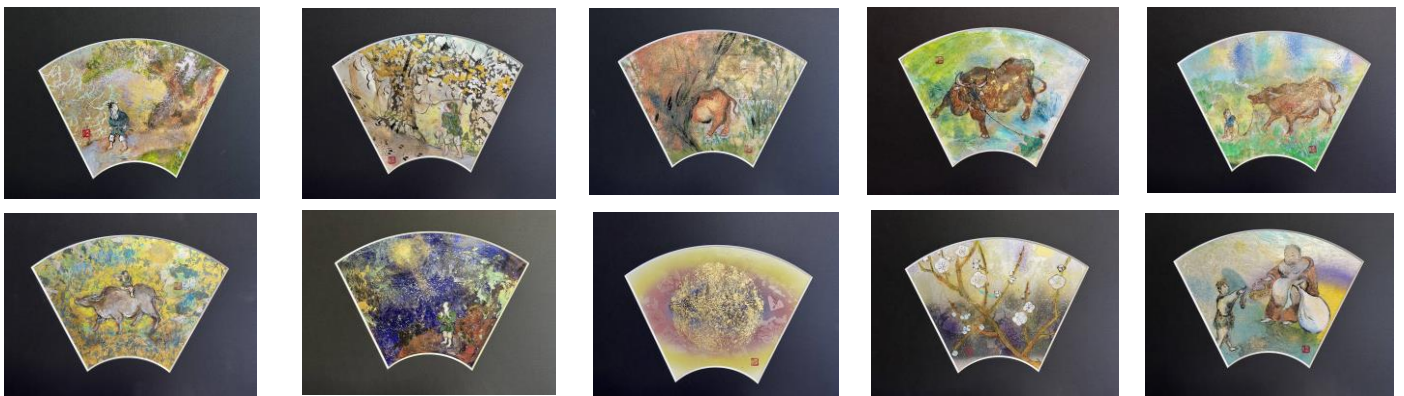
講師 赤木睦代（画家・奈良日仏協会会員）

このたびは、奈良日仏協会の秋の教養講座での講演依頼を受け、フランス留学中の話とパリの個展の話ならできますとのことで、お引き受けいたしました。来年5月9日～13日、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラにて、在スペイン日本国大使館の後援のもと「熊野古道・サンティアゴ巡礼道姉妹道提携20周年」「田辺市・サンティアゴ市観光交流協定10周年」を記念しての個展開催を予定しており、今年に入ってからその準備に追われる日々を送っています。

20歳のとき、文部省派遣留学生として、パリ・エコール・デ・ボザールで学びました。1671年ルイ14世が設立した特別高等教育機関で、350年以上に亘る歴史があり、建築・絵画・彫刻の分野に芸術家を輩出してきた学校です。卒業生には、アングル、ミレー、ドラクロア、ドガ、モネ、モロー、ルノアール、マチス、ジバンシーなど錚々たる方々がいらっしゃいます。この講演を受けたことをきっかけに、そんな方々と同窓だったことを知り、誇らしい気持ちになりました。正門にはプッサンとエールビュシェの胸像を頂部に載せた門があり圧巻でした。

私はZAVARO先生のアトリエに所属し、人物デッサンをメインに洋画制作など丁寧に指導していただきました。先生は、マチスの弟子で馬と女性をモチーフに抒情的な作品を描く優しく心の温かい方でした。慣れないフランス語での美術史の授業は大変でしたが、油絵実技の授業で作品が上手に描けたときは、先生から「ブラボー！」と言っていたことがいい思い出になっています。留学後も日本で個展をするたびにメッセージをいただき、2011年パリで個展を開催した時は、35年を経て感動の再会となりました。35年前の時よりパリの方々がとてもフレンドリーだったことが印象に残っています。「アニメ」や「お弁当」など、日本の文化の浸透によるものだと感じました。

60歳まで中学校の美術教師と牛を描く画家として二刀流でやって参りました。現在は、画家として励みながら、「睦（むつ）の会」を主宰し、地域の方々に作品を通して生きる喜びを味わっていただきたいと頑張っています。100歳まで描き続けていければ最高です。（赤木睦代）



赤木さんの新作『十牛図』：牛はほんとうの自分の象徴。牛を探し求めて旅に出る若者の物語が10枚の絵に表わされています。

**日時：**2023年11月23日（木・祝） **主催：**奈良日仏協会

**会場：**講演会 10:30～11:50 生駒市コミュニティーセンター401 会議室 参加費：会員 200 円、一般 700 円  
懇親会 12:30～14:15 フレンチレストラン「ア・ヴォートル・サンテ」（生駒市新旭ヶ丘 6-26,  
tel 050-5492-7699） 参加費：会員 3,500 円、一般 4,000 円（ランチ・コース&ワイン）

**申込：**メール sugitani@kcn.jp（杉谷） tel 090-6322-0672（杉谷） fax 0742-62-1741（三木）

**締切：**講演会 11 月 22 日（水）、懇親会 11 月 19 日（日）。懇親会にいったん申し込み後に欠席の場合、11 月 19 日（日）までに懇親会幹事 090-6322-0672（杉谷）に連絡。連絡なしに欠席の場合は、後日参加費を徴収させていただきます。 ※詳しくは本号同封のチラシをご覧ください。

## 第 153 回フランス・アラカルト：イギリスとフランス — 奈良国際交流員エマ・ホールズワースさんをお迎えして —

★6月10日(土)、生駒セイセイビル会議室で、第153回フランス・アラカルトを開催し、15名(うち一般5名)の方にご参加いただきました。講師の奈良県国際交流員エマ・ホールズワースさんは、リヨン(右画像)でイギリス人の父、フランス人の母の間に生まれ、英仏両国で育ち、母国語は英語とフランス語が半々とおっしゃるぐらいな上に、日本語もお上手で、自己紹介から始まり、ご自身の体験に基づいた英仏文化の比較についてお話されました。クイズ形式で問いかけたり、身振り手振りを交えたり、飽きさせない話しぶりであつという間に時間が経っていました。地誌、歴史、言語から料理にいたるまで多岐にわたるお話の中で、印象に残ったのは、イギリス人とフランス人はお互いを蛙だのローストビーフだのと馬鹿にし揶揄いながらも、離れられないライバルとして憧れと妬みの両方の感情を抱いているらしいこと。リヨンの「ミニチュアと映画の博物館」というのがとても面白そうなのでぜひ行ってみたいと思いました。(杉谷健治)



★エマさんは笑顔が素敵な女性でした。講演はフランス語と流ちょうな日本語、そして時々英語も使って話してくれました。彼女は、文章を書く時は英語のほうが容易く、フランス語は聞く方が得意だそうです。彼女はリヨンで育ち、その後ロンドンで大学に通いながら、時々父親の実家があるイギリスの湖水地方(右画像)に住んでおられました。何といっても2000年生まれという若いエマさんから見たフランスとイギリスの文化の対比が新鮮で、夢中になってお話に聞き入りました。質疑応答では参加者1人1人の質問に丁寧に応答され、彼女の誠実さを感じました。フランス人ははっきりと思ったことを言う、それに対しイギリス人は返答があいまいで少し優柔不断な面があるそうです。そこが日本人と似ているかも...でした。若いフランス人はラム酒が好きで、友達同士のパーティでは彼女の嫌いなラム酒を皆が持参するとのこと、なぜ？ワインの国フランスなのに、ワイン好きは私だけ？と思うそうです。今度エマさんにお会いするときはぜひワインをお出ししたいと思いました。(高松洋子)



★ゲストのお名前 Emma Holdsworth を見たとき、英語の姓だとすぐ分かりました。テーマの「フランスとイギリス(文化比較)」には大いに興味を惹かれ参加しました。私にとって英仏比較への関心は、個人的な体験に根差したものだと言えます。60年前にイギリス文化の色濃いオーストラリア(シドニー)で、50年前にフランス(ストラスブール)で暮らしたことです。エマさんは両方の文化を自身の中に取り込み、両方の言語を自由に使い、国籍も二重とのこと。どちらの肩を持つ訳でもなく、まさにご両親を愛するように両方の文化を愛しているご様子が感じられました。幾度も敵対しかつ深く交流を重ねた歴史を背景に、両国の文化や国民性は面白おかしく比較されることがあります。しかし悪意やトゲは感じられません。日本と隣国の関係と比較するとき、今日における英仏間の心理的な関係は、羨ましいほど良好だと思いました。隣国人との付き合い方について学ぶことがまだまだありそうです。(濱 恵介)

★このたび、楽しい集まりで貴重な経験をする機会をいただきました奈良日仏協会に感謝申し上げます。日頃イギリスからの国際交流員として働いていますので、生まれ故郷のフランスについてお話しできたのはとてもうれしく思いました。大勢の方々がリヨンを訪れていたこと、さらに私もまだ行っていない地方にも行かれているのを知って、驚きました。温かく迎えてくださり、リヨンについて私の知らないこともいろいろと教えていただきました。重ねて御礼申し上げますとともに、今後とも奈良日仏協会のご発展をお祈りします。(エマ・ホールズワース)

Merci à l'Association Franco-Japonaise de Nara pour une belle journée et une expérience unique. Je travaille à Nara en tant que représentante de l'Angleterre, c'est donc pour cela que cela m'a fait particulièrement plaisir de parler de ma ville natale en France. J'ai été heureuse de voir que beaucoup d'entre vous étaient déjà allés à Lyon, ainsi que dans d'autres endroits en France que même moi je n'ai pas encore visités ! J'ai été très bien accueillie, et ai même appris des choses sur Lyon que je ne connaissais pas. Merci encore, et bonne continuation dans cette belle association ! (Emma Holdsworth)





## 美術クラブ例会（7/6）報告

◆◆7月6日（木）、梅雨の晴れ間の日に、京都市京セラ美術館にて、鑑賞会を開催しました。総勢 17 名（一般 5 名含む）が参加。今回は三野会長がナビゲーターとなり、事前解説と意見交換会冒頭解説で、周到に準備された資料を用いて説明いただきました。展覧会は、古代の神話の自由で奔放な愛、キリスト教世界の家族愛、オランダの世俗の愛、フランス・ロココ時代の雅な男女関係など、テーマに沿って分かりやすく展示されていました。京都市勧業館（みやこめっせ）のカフェ「TERRACE ABURU」で行われた意見交換会では、女性の美しさを再認識して自信がついたという女性の感想や、絵具の鮮明さが 300 年も保たれていることへの驚きなど、様々な意見が交わされました。私個人の感想としては、多くが群像を描いていてしかも裸体に溢れているなかで、単なる室内画に見える「部屋履き」や、古代の廃墟のなかの彫刻にしろ古代の愛が垣間見られるユベール・ロベールの「かつてヴィーナスに捧げられた神殿」が印象に残りました。（杉谷健治）

◆◆酷暑の京都、地下鉄東山駅から、少しでも涼しいように疎水沿いを歩いて、京セラ美術館へ向かいました。コロナ禍の間、美術館へ行くのもなるべく控えていましたし、京都の街を歩くのも一年半振りで、心はずんでいました。LOVE をテーマにした、特別なルーヴル展、様々な愛があります。ギリシャ神話の中の愛、キリスト教の愛、男女の愛、官能的な愛。三野先生に、事前にお教え頂いたフラゴナールの「かんぬき」は、女性の尋常でない表情、若々しい肌の艶やドレスや寝具の光沢に魅了されます。また描かれた一つ一つの物に隠された意味があり、男女二人のおかれた状況が推測されます。どの作品も美しいですが、いちばん見たかったフランソワ・ジェラルムの「アモルとプシュケ」（右画像）は圧巻でした。前に見たと思っていたのですが、記憶違いだったらしく、先ずあの大きさに驚き、心洗われる色彩に魅了されました。プシュケ（人間の娘）の美しさに嫉妬したアフロディテの画策にもかかわらず、息子のアモルの方がプシュケへの愛の虜となってしまう結婚することになります。二人の最初のキスを描いた絵画です。後半の方の作品は、撮影 OK になっていたのですが、鑑賞している人の背中に天使の羽が写真上に現れる、楽しい仕掛けがあったようです。鑑賞後、みやこめっせのカフェで感想を語り合ったのも、楽しい時間でした。（森 裕子）



◆◆美術の殿堂ルーヴル美術館、その膨大な芸術作品から「愛」をテーマにした絵画を集めた今回の京セラ美術館展。あまりの規模と壮大さに、圧倒されるだけに終わってしまいがちなルーヴルの素晴らしさですが、今回の美術クラブでは、三野先生のナビゲーションによる選りすぐりの 8 点の事前解説によって、ピンポイントに鑑賞の極意を教えてくださいました気がして、興味深かったです。鑑賞後の語らいの時間に「アモルとプシュケ」が基になっている「美女と野獣」のお話を聞きながら、モリス・ラヴェルのバレエ音楽、後に二つの組曲として誕生した「ダフニスとクロエ」を思い出しておりました。彼自身「18 世紀末のフランスの画家が想像し描いたギリシャのような巨大な音楽のフレスコを作曲した」と言ったように、この非常に優雅なパストラルはピアニスト、マルグリット・ロンをして「神の存在を意識させた」とまで言わしめています。夜、ふと思いつき、久しぶりにその眩い高峰である「夜明け」を聴きながら、美術探訪の一日が終わりました。（藤村久美子）

◆◆5 月、パリ滞在中のある午前、ルーヴル美術館を訪れました。今回はアントワヌ＝ジャン・グロの大作『ヤッファのペスト患者たちを見舞うナポレオン』（1804 年）を見るのが目的でした。そのあと館内を歩いて、18 世紀フランス・ロココ絵画部門へ行くと、改装中で閉鎖されていました。帰国後、5 月末の混雑した日曜日、東京の国立新美術館の「ルーヴル美術館展」で、パリで見られなかった作品を見ることができました。それから 1 か月を経て、今度は京都の平日、17 人での集団鑑賞でしたが、各人が自分のペースで館内を歩き、それぞれ好きな絵の前でゆっくり心ゆくまで見とれることのできる状況でした。改装後の京都市美術館を訪れるのは初めてでしたが、以前よりも内部空間に広がりが出て、快適な館になったと思います。あとの感想会では、いつものように、参加者それぞれの個性あふれる見解が披露され、笑い声も絶えず、絵を見ることの楽しみが倍加されました。（三野博司）

## 第60回奈良日仏シネクラブ例会（7/30）報告

◆◆7月30日、猛暑の夏の午後、冷房のきいた部屋で、しばしのあいだ日常世界からおとぎの世界にいざなわれ、心地よいひとときを過ごすことができました。子供の頃に本で読んだ物語が動く映像になったのを目の当たりにするのは、違和感も含めて不思議な体験です。金貨や宝石の糞をするロバの映像には思わず吹き出してしまいます。実写化された空・月・太陽の色のドレスそのものの美しさ、それを身にまとう王女の輝くようなオーラ、宮殿の豪華さと対照的な森と小屋の仕掛けにみちた映像、宮殿にヘリコプターで娘の結婚の祝福に駆けつける王と新しい王妃（妖精の化身）。キャストイングの妙を含めて、ジャック・ドゥミ演出の魔術世界を堪能しました。（浅井直子）

◆◆鮮やかな色彩、ミシェル・ルグランの洒落た音楽、美しいコスチューム、小道具（「cake d'amour 愛のケーキ」の中に忍ばせた指輪）、シャルル・ペローの童話をジャック・ドゥミが監督したロマンチックでファンタジックな物語。中でも私の心を躍らせたのは俳優たちの存在である。ロバの皮を被って森の中で暮らし、赤い馬に乗った王子様に見初められる王女は、若く美しいカトリーヌ・ドヌーヴ。自分の娘に求婚する父王は貫禄十分なジャン・マレー。そして、上品で美しい王子の母親役の女優さん、見覚えがあるが名前が浮かばない。配布された解説書に名前が出ていなかったため「あの女優さんは誰？」と話題になったが、最後まで名前が出てこなかった。かの人はミシュリーヌ・プレール。レーモン・ラディゲの小説を映画化した『肉体の悪魔』（1947）でジェラルド・フィリップの相手役マルトを演じた女優である。ジェラルドは若くして亡くなったが、ミシュリーヌはドゥミ監督の他の作品にも出演していて中年になってからも活躍していることがわかって嬉しかった。（長谷川明子）



◆◆ドゥミ監督は子供の頃に、シャルル・ペローの「昔話集」を読んだのか、あるいは、おとなに語り聞かせをしてもらったのだろうか。映画化の望みを抱いたのにちがいない。彼の好きなおもちゃで溢れかえったような宮殿の調度品は、カラフルで豪華絢爛。空の色のドレス・月のドレス・太陽のドレスを着た王女（カトリーヌ・ドヌーヴ）の美しさは息をのむばかりだ。本物の馬も染められて、赤いお馬・青いお馬のパレード。しかし、夢のように美しく荒唐無稽に思えるおとぎばなしだが、人間が古来から口承してきた「おはなし」には、深い「知恵」を蔵している、と心理学者の河合隼雄氏はいう。めでたくハッピーエンドまでには、自立のためのいくつもの試練を乗り越えなければならないストーリーになる。王女はロバの皮を被って、父王の求婚を逃れる。森の小屋で豚飼いの仕事をして、臭い汚いと嫌がられる。王子は妖精からの「退屈か」の謎の問いかけに「退屈なんかしていない。世界には理解したいことがたくさんあるからね」と答えて森に入っていく。冒険心と行動力が、幸運な出会いをもたらす。おとなも子供も楽しめるこの映画は、フランス国内の観客動員数は220万人にのぼり、ドゥミ最大のヒット作となったそう。（小林安貴子）



◆◆1990年、ジャック・ドゥミは、エイズで59才の生涯を閉じました。妻であり、同じく映画監督であるアニエス・ヴァルダは、「ジャックの輝くばかりの少年期と夢見るようなあのまなざし」を永遠に残すため、映画『ジャック・ドゥミの少年期』（1991）を制作します。そこには、フランスの地方都市で映画に夢中になる少年の姿が生き生きと描かれています。『ロバと王女』は、まさにこの少年の心を持ち続けたドゥミの名作であり、ヌーヴェル・ヴァーグ時代の映画人であると同時に、リュミエール兄弟が生み出したリアリズム映画の伝統継承者であるドゥミが、メリエスの魔術幻燈にも多くを負っていることがわかります。ペロー童話にもとづくおとぎ話の世界と、ドゥミが影響を受けたジャン・コクトーの宇宙と、さらに彼が好んだディズニーの様式とポップアートの色彩にあふれ、資金難による手作りの資材が魔法とまざりあって、絶妙のバランスが感じ取れます。（三野博司）

## 今後のシネクラブ例会の予定

第61回例会：ドゥミ特集③『ロシュフォールの恋人たち』 *Demoiselles de Rochefort*, 1967, 123 分, 2023年10月29日（日）

第62回例会：ドゥミ特集④『想い出のマルセイユ』 *Trois Places pour le 26*, 1988, 103 分, 2024年2月25日（日）

※2024年の後半は、ドゥミ特集の後に、今のところルイス・ブニュエル監督のフランス語作品を検討中です。



## 第 154 回フランス・アラカルト：フランス映画の多様性を語る (9/10)

## ー ピエール・シルヴェストリさんをお迎えして ー

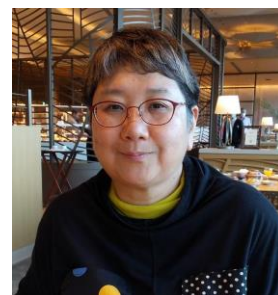
◆◆9月10日(日)、奈良市西部公民館視聴覚室にて開催された講演会に、会員・一般合わせて30名もの方が参加してくださいました。パリ在住会員のピエールさんは4年ぶりの来日。20年前に当協会でシネクラブ活動に携わるようになった頃と変わらぬ熱弁をふるって、映画の解説をしてくださいました。時代・ジャンル・俳優・作品スタイル等、多様性の観点からピエールさんが選んだ10作品中、時間の関係で8本目と9本目は解説なし、10本目は映像も見られませんでした。しかしピエールさん独自の視点やこだわりは、林薫子さんの明快な通訳のおかげもあって、十分参加者に伝わったように思われました。ピエールさんが選んだ10作品は以下です。1)『軽蔑』(Le Mépris, 1963, ジャン＝リュック・ゴダール)、2)『大追跡』(Le Corniaud, 1965, ジェラルド・ウーリー)、3)『リスボン特急』(Un flic, 1972, ジャン＝ピエール・メルヴィル)、4)『悪魔の陽の下に』(Sous le soleil de Satan, 1987, モーリス・ピアラ)、5)『イルマ・ヴェップ』(Irma Vep, 1996, オリヴィエ・アサイヤス)、6)『ダニエラという女』(Combien tu m'aimes ?, 2005, ベルトラン・ブリエ)、7)『君と歩く世界』(De rouille et d'os, 2012, ジャック・オーディアール)、8)『ホーリー・モーターズ』(Holy Motors, 2012, レオス・カラックス)、9)『ガールフッド』(Bande de filles, 2014, セリーヌ・シヤマ)、10)『ラスト・ボディガード』(Maryland, 2015, アリス・ウィノクール)。(浅井直子)

◆◆積極的に対外文化活動を行うフランスの映画音楽は国境を渡ってアメリカでジャズのスタンダード曲になったものも多く、フランス映画には興味がありました。今回参加させていただいたピエール・シルヴェストリさんの「フランス映画の多様性について」の講演は、想像以上に多様で素晴らしく、ピエールさんが、巨匠ゴダールに始まって近年活躍する若手監督の作品など10作品のシーンに続ける情熱あふれる説明に思わず引き込まれました。歯切れの良い素晴らしい林さんの通訳もついていた非常に贅沢な時間でした。続きをぜひお願いしたいです。(森岡由紀子)

◆◆「映画愛」あふれるシルヴェストリさんのコメントに終始圧倒され、林さんの活きのいい訳出にプロの粋を見る。アラカルトから数日が経ち、なお浮かび上がるのは、『軽蔑』の滲む日の光に染まるバルドーの裸体、『リスボン特急』の最果ての地の巖に砕ける白波の激しさ、『ダニエラという女』の本気の恋に変わり揺れる美女の瞳と虚ろな声。『君と歩く世界』の波のきらめきに人魚のように変わる車椅子の恋人。『ガール・フッド』の黒人の女の子たちの若さが抱える孤独。瞬時の映像は多様な色彩と音声と共に甦る。これぞ映画の力と実感する。(竹下明江)

◆◆最初の抜粋映像がゴダールの『軽蔑』(1963)だった。ブリジット・バルドーを見るのは実に50年ぶり。昔はあまり好きではなかったが、美しい彼女の裸体を見て、帰宅後、ネットで探して全篇をみた。原作はアルベルト・モラヴィアの同名小説だが、ゴダールは2年前に結婚したばかりの妻アンナ・カレーナとの愛の問題に苦悩し、自己を投影して、愛の不可能性を描いたといわれている。結末はかなりショッキングだった。あとの9本も追々見てみようと思っている。(小寺順子)

◆◆事前にピエールさんから10作品のレジメをいただいたとき、これまでみたことある映画は1本もなく、ゴダール、バルドー、カラックスと映画の歴史教科書的なラインナップで正直不安になりました。でも当日のピエールさんの熱い語りのおかげでこちらまで楽しく通訳できました。そして、「難解で文学的で男と女の話ばかりと思われているフランス映画をイメージして今の多様性」を知り、さらには「フランス映画みてみようかな？」と思っただけならば幸いです。(林薫子)



◆◆J'ai ressenti une joie débordante et bien sûr une vive émotion en étant parmi vous pour la conférence sur la diversité du cinéma français du dimanche 10 septembre. Je tiens à remercier toutes celles et tous ceux qui ont eu la gentillesse de venir y assister, particulièrement Madame Hayashi qui est une formidable interprète. J'ai déjà plus que hâte de vous revoir pour discuter de cinéma et de bien d'autres sujets. Merci encore et à bientôt ! 9月10日(日)のフランス映画の多様性についての講演でみなさんの中にいた時、あふれてくる喜びと強い感動がありました。参加してくださった方たちすべてに、とりわけ素晴らしい通訳をつとめてくれた林さんに、感謝申し上げます。みなさんとまたお会いして、映画やその他のテーマについて話をすることが待ちきれない思いでいます。(Pierre Sylvestri ピエール・シルヴェストリ)



## 定年後のフランス一人旅（２） 中浦 東洋司（なかうら とよじ）

ロワールの古城めぐりは長年の念願でした。日本でも雑誌やテレビの映像などでよく紹介されていたので、なんとなく知っているつもりで、お城に近い駅まで行けばなんとかなるだろうと、はやる気持ちでパリのモンパルナス駅から列車に乗りこみました。シュノンソー城（右下画像）をめざしたのですが、列車に乗ってから地図を見て「シュノンソー駅」がないことに気づき、車掌さんに尋ねて「サン＝ピエール＝デ＝コール駅」で下車しました。駅前のパブに入って城への行き方を尋ねると、イタリア人女優ソフィア・ローレン似のマダムが親切に、バスがあることを教えてくれました。20分ほどでシュノンソー城に到着し、城を見学することができました。シュール川にかかる橋脚の上の建物を目にした時は、フランスの王や王妃たちの面影が浮かんできて、何十年來の夢の実現に感慨もひとしおでした。



城見学を終えてバス停に戻ると、16時半発の最終バスがちょうど出たあとでした。その日は奮発してパリのインターコンチネンタル・ホテルに予約していたので、何としてでもパリに戻らなくてはなりません。幸い、バス停のすぐ前にあったガソリンスタンドの人に、給油に訪れる車に頼んでみたらと言われ、思いきって20代の若いカップルの車の男性ドライバーに声をかけてみました。「助けてください、バスに乗り遅れてしまいました。パリへ帰るのに最寄りの駅まで乗せていってくれませんか?」。すると、《Volontiers!》と笑顔の答えが返ってきました。地元の人だったようで、道中の別の城のことも教えてくれました。私が日本人と知って、自分たちはニコンのカメラを持っていると言って日本のことを褒めてくれるので、私は思わず《Merci!》と言ってしまいました。降りしてもらった駅の名前は忘れてしまいましたが、来た列車に乗ってオルレアン駅で乗り換え、無事にパリのオステルリツ駅に到着することができました。

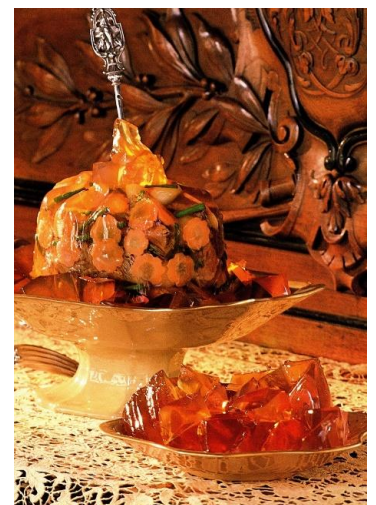
フランス旅行中には様々なハプニングがありましたが、この「ヒッチハイク」は忘れがたい思い出のひとつです。日本でも経験したことがなかったのに、定年すぎてから、まさかフランスですることになるとは…!

## ブルースト雑感（6）厨房のミケランジェロ 浅井直子（あさい なおこ）

小説『失われた時を求めて』に盛りこまれた多種多彩な比喩は、再読しても読書の楽しみを広げてくれています。それまで関係がないように思われていた二つの事物や事柄が比喩によって結びあわされることで、新鮮な感覚が生まれてくるのです。その内容は哲学的なものから日常生活に関するものまで様々ですが、お腹がすいている時などに読むと、「料理」に関する比喩がぐっと身近に感じられます。

主人公の家にはフランソワーズという住み込みの家政婦がいます。彼女は料理が得意で、ある日、家の客として招待された外交官ノルボワに、自分だけが知っている方法で作る「冷製牛肉のニンジン添え」を出して絶賛されます。そこで語り手は、フランソワーズがその料理を作るために、パリのレ・アール市場で牛肉を買い求める際に、「牛の腰肉、手のすね肉、子牛の足肉のいちばん上等のかたまり」を探すことを、イタリアの偉大な彫刻家ミケランジェロがトスカナ地方のカッラーラ山中で大理石の塊を選んだことに喩えます。そして、彼女の料理には、才能に恵まれた芸術家の創造の歓びがあるということです。

フランス人の食文化と日常生活の一端を読者に知らせてくれると同時に、食事のための買い物が、ルネサンスの芸術家の作品創造に通じているという発想が面白く感じられます。語り手はさらに、「透明水晶のかたまりに似た巨大なジュレの結晶」の上にのった冷製牛肉のニンジン添え（右画像）をテーブルに運ぶフランソワーズを、ユーモアもこめて、「わが家の厨房のミケランジェロ」に喩えるのです。



『ブルーストの食卓』より  
宝島社、1993年

ところで私も、夕食の買い物に出かけて食材を選ぶ時にブルーストの比喩を想い出すと、なるほど、レベルは違っても自分がしているのは、あのミケランジェロにも比肩されるようなことに通じるのかと思うと、新鮮な気持ちになります。スーパーマーケットをカッラーラ山中、売り場に並ぶ何万点もの商品を石切り場にあるたくさんの石に見立てて、個人的な経験と直感を駆使してこれという食材を選んで、思い描いた料理を作ることができた時には、達成感があります。たとえ一瞬でも「私は台所のミケランジェロ?」などと想像をふくらませると、日々の生活がいっそう豊かに感じられてきます。



## Paysage français フランスの風景 (2)

### Jardin du Luxembourg à Paris パリのリュクサンブール公園

オリヴィエ・ジャメ

Dans ce deuxième article, permettez-moi de vous emmener dans ce qui est, pour moi, le plus beau jardin de Paris.

Il est situé Rive Gauche. Ce jardin m'offre tout ce que j'aime le plus au monde : quiétude, histoire, classicisme des formes..., et tout cela dans un Paris bourdonnant, dans un Paris voltigeant, dans un Paris agissant... Son château, que l'on appelle le Palais du Luxembourg et qui fut construit par Marie de Médicis, me plaît beaucoup. Son jardin aussi me plaît beaucoup. Il est beau, esthétiquement, et contient quantité de souvenirs qui me sont chers. Ceux d'un Olivier lycéen qui prenait tôt, Place Péreire, son autobus 84, traversait tout Paris et longeait finalement les grilles mystérieuses de ce jardin avant d'être déposé place du Panthéon, devant son lycée Henri IV. En début de soirée, de son autobus, en rentrant, il en contemplait longuement les grilles dorées... Ceux d'un Olivier étudiant, qui s'y réfugiait chaque fois que cela lui était possible, ceux d'un Olivier devenu plus âgé, qui lui rendait visite chaque fois qu'il revenait à Paris... Ah, ce jardin, avec ses allées à la française, ses allées à l'anglaise, ses bancs, ses chaises, ses coins secrets, ses fleurs, ses bassins, ses fontaines, ces lieux où il se plaisait à lire, à écrire ou à méditer... Et puis, ce jardin fut aussi le jardin de l'Amour... Ce que raconta si bien Gérard de Nerval en 1832 dans les vers suivants (Tome VI des Œuvres complètes, Calmann Lévy, Paris, 1877).

「フランスの風景」連載第2回目は、私にとってパリでもっとも美しい公園にみなさんをお連れします。

セーヌ左岸のこの公園は、私がこの上なく好きなものを与えてくれます。安らぎ、歴史、古典主義の表現形式...、そのすべてが、騒がしく、変わりやすい、活動的な...パリの中にあるのです。リュクサンブール宮殿と呼ばれる城は私のお気に入り、マリイ・ド・メディシスによって建てられました。庭園もまた私は大好きです。芸術的に美しく、ここにはたくさんの私の大切な思い出が含まれています。高校生の私は、朝早い時間にペレール広場から84番のバスに乗ってパリの街を横切り、リュクサンブール公園の神秘的な鉄柵に沿って進んだ後、通っていたアンリ4世校前にあるパンテオン広場で下車していました。黄昏はじめる頃、帰りのバスの中から黄金色になった公園の鉄柵を、長いあいだ見つめていました。大学生の私は、できうるかぎりこの庭に逃げこんでいました。年齢を重ねてからは、パリに帰る度ここに訪れていました。そう、この庭園にはフランス風とイギリス風の小道、ベンチ、椅子、ひっそりした一角、花々、池、噴水があり、これらの場所で読書したり、何か書いたり瞑想にふけったりするのを楽しんでいました。そしてこの庭園は「愛」の庭でもあります... 1832年のジェラルム・ド・ネルヴァルの以下の詩句に、それが見事に語られています。(カルマン・レヴィ社『ネルヴァル全集』第6巻, 1877年: 和訳は筑摩書房『ネルヴァル全集I』所収「リュクサンブール公園の小道」より, 1975年, p. 143-144.)

Elle a passé, la jeune fille  
Vive et preste comme un oiseau  
À la main une fleur qui brille,  
À la bouche un refrain nouveau.

彼女は通り過ぎた、少女は、  
小鳥のように、快活に、急速に、  
手に一輪、花がきらめき、  
口に、新しいルフラン。

C'est peut-être la seule au monde  
Dont le coeur au mien répondrait,  
Qui venant dans ma nuit profonde  
D'un seul regard l'éclaircirait !

おそらく、この世で、ただひとりの女、  
その心が私の心に交換するような、  
私の深い夜のなかにやってきて、  
ひと目で私の心をあかるく照らすような！

Mais non, – ma jeunesse est finie ...  
Adieu, doux rayon qui m'as lui, –  
Parfum, jeune fille, harmonie...  
Le bonheur passait, – il a fui !

否、否、一青春は去った……  
さようなら、私にかがやいたやさしい光よ、一  
花の香よ、少女よ、音楽よ……  
幸福はすぎて行った、一逃げてしまった！

Ce jardin me surprendra toujours, comme au moment où, avec des éclats de rire cristallins, des enfants sortent de son théâtre de Guignol... Le Douanier Rousseau, lui aussi, le visita et en laissa un beau témoignage pictural, « Les jardins du Luxembourg, monument à Chopin ».

この公園はこれからもずっと私を不意に驚かせてくれることでしょう。子供たちが澄んだ笑い声をたてて人形劇の劇場から出てくる時のように…。画家のアンリ・ルソーもまた、ここを訪れ、その証として美しい絵画作品『リュクサンブール公園、ショパン記念碑』（1909年、エルミタージュ美術館所蔵、[右画像](#)）を残しています。



## 随想「パストゥール」

角田 茂 (つのだ しげる)

La science n'a pas de patrie. 科学に国境はない。

ルイ・パストゥール (Louis Pasteur: 1822-1895) : パストゥール研究所開所式記念講演 (1888 年 11 月 14 日)

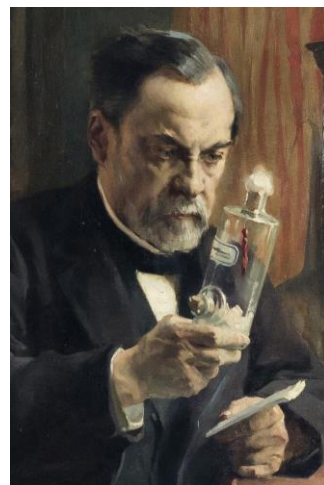
パストゥール研究所のモンタニエ (Luc Antoine Montagnier: 1932-2022, ノーベル生理学・医学賞受賞: 2008) が HIV ウイルスを発見し、報告したのは 1983 年 5 月である。それから 1 年も経たない 1984 年の冬、私が留学していたフォッシュ病院脳神経外科に、てんかん発作を主訴とする中年男性が開業医から紹介されて来た。造影 CT 検査で脳内に、リング状に造影される多発性小病巣があったので、脳神経内科が担当することになった。数日後、トキソプラズマ脳炎であることが判明、血液検体をパストゥール研究所に送ると、エイズ (AIDS) の診断が得られた。現在では、トキソプラズマ脳炎がエイズ (AIDS) 患者の脳内合併症として最も多いことは広く知られている。

パストゥールによる光学異性体の発見は有名である。高等師範学校卒業後、最初に行った研究が、ワインに含まれる有機物、酒石酸に関してであった。ボトルの底に沈殿する酒石は、酒石酸塩である。彼はこの成分である酒石酸の結晶に光学異性、すなわち化学式が同一でも、左手型 (L 体) と右手型 (D 体) があることを発見した (1849 年)。実験室で酒石酸を合成すると、L 体と D 体は等量混合物 (ラセミ体) であるが、ワインの酒石酸はすべて L 体のみである。また自然界のアミノ酸の大部分は L 体である。

このような中で発展した有機化学が不斉合成 (仏: *synthèse asymétrique*, 英: *asymmetric synthesis*) である。すなわち、L 体もしくは D 体のみを合成する化学である。この不斉合成を世界で最初に成功させたのは、フランスのカガン (Henri B. Kagan: 1930-) であった。ところが、2001 年にノーベル化学賞を授与されたのは、シャープレス (Karl Barry Sharpless: 1941-)、野依良治、ノールズ (William Standish Knowles: 1917-2012) の 3 人であった。ノーベル賞発表直前に授賞式があったウルフ賞では、カガン、野依良治、シャープレスの 3 人が受賞している。本来ならばこのような人選がなされるべきであったが、L-ドーパ合成の工業化に寄与したとのことでノールズが受賞してしまった。このことに対して、ル・モンドを初めフランスの新聞各紙は抗議した。翌年、2002 年のノーベル化学賞では、世界的に名前がほとんど知られていなかった田中耕一が、ソフトレーザーによる質量分析技術開発の第一発見者として、受賞者の中に入った。ノーベル賞は本来、推薦者の多い研究者ではなく、このように第 1 発見者に与えられるべきものである。また野依良治は 2002 年に国際賞「野依賞」を創設し、第 1 回「野依賞」を尊敬するカガンに授与している。2001 年にノーベル化学賞を取ったシャープレスは、昨年、2 つ目のノーベル化学賞を取っている。

パストゥールの人生を語る時、避けて通ることができないのが、自然発生論争である。自然発生 (仏: *génération spontanée*, 英: *spontaneous generation*) とは、「ウジがわく」という言葉に象徴されるように、何も無いところから生命が誕生するということである。パストゥールはこの自然発生説を独自の実験により否定し、生物の発生には必ず、もとなる個体が必要であることを証明した (1861 年)。この時使われたのが白鳥の首フラスコである。通常のフラスコと白鳥の首フラスコに肉汁を入れた場合、前者の方が早く腐敗し、後者の方は腐敗するまでに時間がかかる。また、肉汁を入れた同じフラスコでも、パリではすぐ腐敗するが、空気のきれいな高山では腐敗するまでに時間がかかる。このような実験を通し、空気中には多くの微生物が存在することや、腐敗も発酵も微生物によるものであることを証明した。パストゥールの一連の実験データを知った、グラスゴー大学の外科医リスター (Joseph Lister: 1827-1912) は、手術施行時、石炭酸による消毒法を導入し、術後感染の劇的な減少を報告している (1867 年)。1840 年代に米国で確立したエーテルによる麻酔法とこの消毒法の確立により外科学誕生の基礎が築かれた。グラスゴー大学のマキューエン (Sir William Macewen: 1848-1924) は 1879 年、脳腫瘍 (髄膜腫) の手術を、ウィーン大学のビルロート (Christian Albert Theodor Billroth: 1829-1894) は 1881 年、胃癌の手術 (ビルロート I 法) を行っている。

パストゥールは脳内出血 (1868 年) による左半身不全麻痺にも関わらず、精力的に研究活動を続け、炭疽菌と狂犬病の弱毒化ワクチンを作製した。ワクチン (仏: *vaccin*, 英: *vaccine*) という言葉は牛痘 (仏・英: *vaccine*) 由来の言葉で、パストゥールがジェンナーの功績に敬意を表して作った言葉である。1987 年には、狂犬病のワクチン作製と治療を行うパストゥール研究所が世界各国からの寄付金により設立された。米国において 1901 年にロックフェラー研究所 (現在: ロックフェラー大学院大学) が創設されるが、これはパストゥール研究所をモデルとしたものである。





## マティスの冒険

神澤 透 (かんざわ とおる)

東京都美術館（以下トビカン）に 2023 年春から夏にかけて、「マティス展」（主にパリ国立近代美術館より出品）が来ていました。また、「マティス 自由なフォルム展」（主にニース・マティス美術館より出品）が 2024 年冬から春にかけて国立新美術館にて開催される予定です。同展はコロナ禍の 2021 年に企画されていましたが、延期になっていたものです。同じ年度に二つのマティス展が開かれるこの至福！ 2024 年は画家没後 70 年にあたります。マティス（Henri Matisse 1869-1954）は言うまでもなく、色彩の魔術師として知られており、モダンアートの先駆者です。後世に与えた影響は測り知れません。

パリ国立近代美術館の収蔵品は、マティスが晩年まで手元に残しておいた作品ばかりで、彼の作品の発展段階が分かります。マティスは、色々な手法を用いて、同じテーマの作品を数多く描き、実験を重ねています。トビカンではその過程の解説が丁寧になされていました。色彩と光の芸術家は、デッサンや彫刻を通して自分が抱いた感動を翻訳しているのだと言っています。最初はロダンの影響を受け、彫刻からのインスピレーションで絵画を生み出していましたが、彫刻自体ロダンの影響からは離れ、フォルムも変化していきます。彼は線をより重要視していったのです。色彩の魔術師が 1920 年に最初に刊行した画集は、色彩ではなく線の集まりであるデッサンをまとめた『50 のデッサン』でした。デッサンは、色彩とともに画家にとって重要な表現手段となりますが、その重要性は時を重ねるに連れて増していきます。

マティスは、自然を写し取るのではなく、解釈するのだ、と言います。先程の感動を翻訳するという言葉と自然を解釈するという言葉は、翻訳と解釈の類似性に思い至ると豊かに響き合います。また、「全ての芸術家は、その時代の刻印を担っている」といい、20 世紀の前衛的な芸術家とは異なり、自らの画業に普遍的な世界観と結びつくような芸術の原理を主張したり、既存の価値に対するあからさまな反発を示すことはありませんでした。ブルジョワに反抗することをせず、自身の表現を「装飾的」な構成とよび、自らの芸術が、人々の精神の疲れを癒す良き「肘掛け椅子」であることを望んでいました。

館内を巡っていくと、マティスの冒険を体感することができます。自らの師ギュスターヴ・モローにとにかく過去の絵画を模写するように教えられ、それを実践し、自らの絵も古典派のようでした。それが新印象派の影響を受けた『豪奢、静寂、逸楽』（1904）で一変します。これがぼくが受けた第一の衝撃でした。次の時代、1905 年～11 年は、彼の名を世間に知らしめたフォヴィズムの時代です。しかしながらこの時代の作品の中で、展示されていたのは、『豪奢 I』と『アルジェリアの女』のみでした。

その後 1912 年～1916 年は、モロッコ旅行から第一次世界大戦の時代となります。モロッコの光の中で得た色彩で抽象度の高い作品を描くようになります。まず目に入るのが『金魚鉢のある室内』です。金魚鉢はオリエンタリズムを象徴し、彼の絵にはよく描かれるようになります。そして問題作の『コリウールの黒い窓』。窓の外が真っ黒に塗り潰されているのです。第一次世界大戦を受けての絵とされていますが、謎に包まれているようです。そして、1917 年末厳しさを増す戦況の中、画家はニースに移住します。

この時代以降 30 年代の作品が展示されているトビカン 2 階は、全フロア撮影 OK になります（下の画像はこのフロアで撮影したものです）。オリエンタリズムの象徴である『オダリスク』（左画像）があります。『夢』（中央画像）や『座るバラ色の裸婦』（右画像）などが印象的です。特に『座るバラ色の裸婦』は、抽象度が高く色々な想像力をかき立ててくれます。画家は少なくとも 13 回書き改めているとのこと。その回毎に写真撮影されていて記録として残っています。これがぼくにとっての第二の衝撃でした。その後の絵も描き変えられる毎に写真で残すようになります。冒険家と言って良いのではないのでしょうか。3 階に行くと最もマティスらしい切り紙絵の世界に突入していきます。終生悩み続けた線と色彩の融合に成功したのです。最晩年には、ヴァンス・ロザリオ礼拝堂の装飾を手掛けました。そして、鐘の音を聞きながらツアーは終了します。



## 江戸時代における海外言語コミュニケーション 樋口順一（ひぐち じゅんいち）

1636 年（寛永 13）に築造された長崎の出島は、1859 年（安政 6）、オランダ商館が閉鎖される 218 年間に渡り、わが国で唯一西欧に開かれた窓でした。江戸幕府は、キリスト教を厳禁し制限した政策を行います。同時に外国との貿易をオランダ・中国に限定し、貿易や人を管理・統制・制限した政策を行います。

オランダがアジアに進出する前のアジアで使われた共通の欧州言語はポルトガル語でした。長崎の出島は、キリスト教禁止令に関わるポルトガル人隔離のために造られ、寛永 16 年にはポルトガル人をわが国から追放します。そして寛永 18 年、平戸のオランダ商館をこの出島に移転させます。その結果出島にある日蘭交渉の間で通弁に当たり、翻訳に従事したのが阿蘭陀通詞（オランダつうじ）です。オランダ通詞以外に唐通事（とうつうじ）という中国語や東南アジアの言語を専門とした集団が存在していました。寛政年間後半から文化年間初頭（1800 年前後）になると、わが国の北辺に現れたロシア船や長崎に侵入した英船事件などから、1808 年（文化 5）幕府はオランダ通詞たちに、ロシア語、フランス語、英語、満州語への対応を命じます。オランダ通詞達は勤務地の長崎を離れ、江戸や蝦夷地などへ派遣されることとなります。

1853 年（嘉永 6）7 月アメリカのペリーが浦賀にやってきます。ペリーは日本との交渉を何語で交渉すべきか、英語、オランダ語、日本語、中国語の中から検討しています。清朝中国との交渉で漢文以外を使用できなかった経験から、英語案を除いています。そして、オランダ語・中国語（漢文）の通訳を同行し日本側に英語文書のほかに中国語（漢文）とオランダ語の翻訳文書を添え提出しています。後の再来時には中国語文書を除くことを定めています。

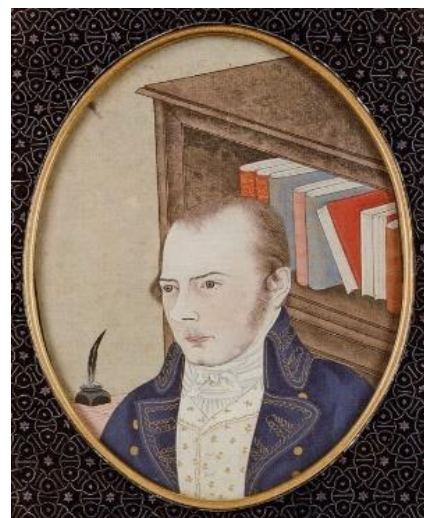
1853 年ペリーが日本を去った一カ月後、日本との国境画定と交易を求め、長崎にロシアのプチャーチンが来航します。交渉では日本語文書が難しいのでオランダ語を求めるロシア側の要請が見られます。なお、日露和親条約の交渉担当者は、奈良奉行でも知られた幕府勘定奉行・川路聖謨（かわじとしあきら）です。日露間で初めて公式に交わされた外交条約である和親条約の締結日が 1855 年 2 月 7 日（旧暦・安政元年 12 月 21 日）であったことから、2 月 7 日を現在の「北方領土の日」としています。

言語の異なる国家間の交渉には通訳が重要な役割を持ちますが、通訳に関して次のような話があります。1854 年 9 月イギリス船ウインチェスター号が長崎にきます。この時、音吉という尾張出身の日本人の漂流者を通訳として伴っていました。しかし、音吉は幕府の役人が用いる漢字が読めず、奉行との間で取り交わされる書簡や文書の翻訳には全く貢献出来ませんでした。結果英語文をオランダ商館長がオランダ語に訳しこれを日本語に翻訳しています。また、ペリー来航の折の日本側通訳に、海で遭難し米国船に助けられたジョン万次郎が取りざたされましたが、水戸藩主の徳川斉昭の反対で実現しなかったとのことです。

1859 年（安政 6）横浜が開港します。福沢諭吉が外国人居留地に入ったところ、「全く言葉が通じない。しかし今世界で最も通用している言葉は英語だからと蘭学から英学へ転向を決心した」と『福翁自伝』にあります。オランダ語は日本での唯一のヨーロッパ言語として、重要なツールでしたが、英米との通商開始とともに英語やフランス語などが重用されることとなり、明治時代にはしだいに関心が示されなくなりました。

こうした歴史をふり返ってみますと、言語の異なる国家間の交渉において、通詞や通訳の果たす役割がいかに大きいのか、あらためて思い知らされます。それでは、日本人のフランス語学習はいつから始まったのでしょうか？ 先ほどうし触れましたが、わが国の北辺にロシア船が現れたのをきっかけに、1808 年（文化 5）幕府がオランダ通詞たちにフランス語への対応を命じたのが始まりです。

『フランス語事始』（富田仁著、NHK ブックス、1983 年）によれば、1808 年オランダ通詞の本木庄左衛門（正栄）たちが、当時長崎出島のオランダ商館長を務めていたオランダ人ヘンドリック・ドーフ（1777-1835, 右画像）からフランス語を学び始めます。その後、正栄は英語の学習を命じられ、わが国初の英語辞書の編纂に携わります。その仕事を終えると正栄はフランス語の学習を再開し、仏和辞書『仏郎察（フランス）辞範』と『和仏蘭対訳語林』を編纂しました。正栄はその後も、オランダ語を基礎外国語にして、フランス語や英語の研究に携わり、蘭学から洋学の発展に貢献し、多くの著書の翻訳の仕事をしました。





## パリの禅道場

三野 博司（みの ひろし）

若いときに読んだ本で忘れがたいものは数々あるが、弟子丸泰仙『禅僧ひとりヨーロッパに行く』（春秋社、1971年）もその一冊である。学生時代に禅の本を読み漁り、京都の禅寺の参禅会に顔を出していた私は、弟子丸という禅僧のスケールの大きさに圧倒された。その後、私の関心は禅からヨガへと移って行っていたが、70歳になって、原点に戻ろうと思いたち、2020年7月から土曜の夜ごとに、奈良の九条にある曹洞宗の三松寺へ通う身となって3年が経つ。

それまで年一、二度おこなっていた渡仏がコロナ禍によって中断したあと、ほぼ4年の空白を経て、2023年5月、パリを訪れた。国際カミュー学会の理事会に出席し、昼食会に参加し、講演を聞き、別の日々に友人たちと個別に昼食を取ったり、お茶をしたり、コンサート会場や美術館通いなど、これまでと変わらないが、今回初めての体験は、パリでフランス人たちと一緒に坐禅を組んだことである。

弟子丸泰仙がパリに到着したのは1967年。ヨーロッパでは、禅は一部の知識人が鈴木大拙の著作によって知るのみであったが、弟子丸はそこへ曹洞宗の坐禅の実践をもちこんだのだ。68年の五月革命の気運のなかで、彼の周囲には若いフランス人たちが結集した。

弟子丸がパリ14区のPernetyに開いた小さな道場は、いまでは、13区のRue de Tolbiac 175番地の建物の1階から3階を占めている。Dojo Zen de Parisでは、毎日朝昼晩と3回の禅会が開かれているが、私は自分のパリ日程の隙間である木曜日の昼を選んで出かけて行き、結跏趺坐を組んだ。20名ほどの参加者が坐蒲をもって広間に入り、曹洞宗の流儀で全員が壁に向かってすわる。木版の殿鍾三会で始まり、止静鐘が鳴り、一炷目、経行、そして二炷目。放禅鐘によって終わったあとは、四弘請願、般若心経。この日の指導者のフランス人女性に、私が自己紹介をかねてあいさつすると、上の階で茶話会をやる人たちがいるから参加してはどうかと誘われた。そこには、男女3人ずつの常連たちがいた。坐禅歴10数年の人たちである。そのなかで、まだDébutanteなのよ、と言った若い女性Dominiqueは、それでも3年のキャリアがあるという。彼女は秋に京都、奈良を訪れる予定だとのことで、再会を約して別れた。

弟子丸は82年に逝去するが、多くの弟子を育て、各地に道場を建て、その教えはヨーロッパ全域に広まっている。ロワール地方ブロワ近郊の古い城館を買い取って改装し、禅寺Temple Zen de la Gendronnièreを開いた。パリの禅会の参加者からは、このヨーロッパにおける「永平寺」のような修行場の話を聞くことができたのも収穫であった。



## ラグビーワールドカップ 2023年 フランス大会 高松 洋子（たかまつ ようこ）

ラグビーのワールドカップ フランス大会に日本チームの応援に行ってきました。パリを経由して、夕方遅い便でニースに入り、海沿いの魅力的な街アンティープに隣接するジュアン・レ・パンというリゾート地のホテルに宿泊して、翌日の9月17日に、ニースで行われた日本対イングランド戦を応援しました。残念ながら日本は負けましたが、イングランドやフランスの方々ที่が気さくに声をかけてくださり、大変盛り上がったゲームでした。

翌日から数日間は南仏を旅しました。憧れのグレース・ケリーのモナコに始まり、映画祭で有名なカンヌ、プロヴァンス地方ではアルルや、エクス・アン・プロヴァンス、フランスの美しい村に選ばれているゴルドやルシオンを訪問しました。宿泊したアヴィニョンは町全体が城壁に囲まれ、中世からまるで時間が止まっているかのようでした。

またシャトー巡りに訪れたボルドーは、ワイン貿易のお蔭で重厚な建築物が並ぶ大きな町であることがわかりました。

9月23日は、パリでアイルランド対南アフリカ戦を観ました。接戦で見応えがありました。TVで放映されていたパリのコンコルド広場で行われているW杯のイベント広場に行ってみたのですが、ものすごい人で、入場をあきらめました。フランス中ラグビーファンであふれているのに圧倒されました。



アイルランド対南アフリカ戦（スタッド・ド・フランス）

## ガイドクラブ「会津ハーの歌碑をたずねて」(10/23) 案内

奈良の各地に足跡を残す歌人・美術史家の会津ハーについての講演を聴き、秋篠寺や東大寺などの歌碑を巡ります。

- ✳️ 講演：2023年10月22日（日）12：20～14：10 ✳️ 会場：生駒市セイセイビル4階401室
- ✳️ 講師：柏木隆雄さん（大阪大学名誉教授） ✳️ 申込先：sugitani@kcn.jp TEL. 090-6322-0672（杉谷）
- ✳️ 歌碑巡り：14：30～17：20 行程は Mon Nara 通信8月号から若干変更あり。参加申込者には直接連絡します。
- ✳️ 参加費：会員200円 一般700円（秋篠寺拝観料500円、奈良交通バス、近鉄電車は別途各自負担。
- ✳️ 懇親会：有志のみ。17：30から「菜宴」にて。費用は各自負担（4,000円程度）。

## 第61回奈良日仏シネクラブ例会『ロシュフォールの恋人たち』(ジャック・ドゥミ特集③)(10/29) 案内

- ✳️ 日時：2023年10月29日（日）13:30～17:00 ✳️ 会場：奈良市西部公民館5階視聴覚室 ✳️ 予約不要
- ✳️ プログラム：『ロシュフォールの恋人たち』(Demoiselles de Rochefort, 1967年, 123分)
- ✳️ 参加費：会員200円、一般300円 ✳️ 問合わせ：Nasai206@gmail.com tel. 070-1731-0230（浅井）
- ✳️ ジャック・ドゥミ特集第3回目は、カトリーヌ・ドヌーヴと実姉のフランソワーズ・ドルレアックが双子の姉妹役で、生き生きとした歌と踊りを披露してくれるフレンチ・ミュージカルの代表的な作品です。フランス南西部の港町ロシュフォールを舞台に、ミュージカルの本場ハリウッドから招かれたジョージ・チャキリスとジーン・ケリーも加わって、大勢いの出演者たちが、ミシェル・ルグランによる陽気でテンポのいい音楽に乗って、青空の下でのびのびと身体を動かして踊ります。ドゥミが求める「過去」から「未来」への「愛」のテーマが、ドラマを底流で支えています。乞うご期待！

## 2024年度総会(2/11)開催のお知らせ

2024年度の総会を、来年2月11日（日・祝）午後に、「菜宴」にて開催する予定です。コロナの状況をみながら、総会後、会食を伴う懇親会も開催の方向で検討しています。

## 《2023年度第4回理事会報告》…事務局

日時：2023年9月21日（木）15:00～16:40。場所：野菜ダイニング「菜宴」。  
出席者：三野、浅井、蘭田、喜多、三木、杉谷。議題1. 会員数確認。議題2. 7/20理事会後の活動：(7/30) 第60回シネクラブ例会『ろばと王女』、(9/10) 第154回フランス・アラカルト「フランス映画の多様性を語る」。議題3. 今後の行事：(10/22) ガイドクラブ「会津ハーの歌碑をたずねて」、(10/29) 第61回シネクラブ例会『ロシュフォールの恋人たち』、(11/23) 秋の教養講座・講師赤木睦代、(2/11) 2024年度総会「菜宴」にて、議題4. 30周年記念行事：記念式典の開催と記念文集の発行、議題5. Mon Nara 通信 No.16、Mon Nara No.303 10/16 発送予定。議題6. その他：次回理事会 11月16日（木）15：00～16：30「菜宴」にて。



**編集後記** ☆「キク」(chrysanthème) は、日本には奈良時代末か平安時代初めに中国から導入されたと推定されています。『万葉集』には菊を詠んだ歌は一首もなく、平安時代の『古今和歌集』頃から盛んに詠まれるようになります。江戸時代の元禄期以降、育種がさかんになり、「菊合わせ」と呼ばれる新花の品評が行われ、独自の品種群が生まれます。浮世絵には当時の風俗とともに菊の花が描かれています。江戸時代から明治、大正時代にかけて日本独自の発展をした古典園芸植物となり、日本の菊は幕末には本家の中国に逆輸入されるようになります。明治時代には大輪の菊が盛んになりました。☆日本の菊がフランスに導入されたのは1860年代。それから20年後、パリの社交界を中心とする日本趣味の流行により、大輪の菊の花が愛でられるようになります。ピエール・ロチの小説『お菊さん』(Madame Chrysanthème, 1887年)はその流行を示す一例です。ロチは1885年、開国間もない日本に軍人としてやって来て、長崎のお菊という女性と暮らしたことを小説にしました。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2024年2月号は**1月30日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさまで「Mon Nara」(2月、6月、10月発行)又は「Mon Nara 通信」(4月、8月、12月発行)に**チラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

**Mon Nara** 2023年10月号 numéro 303

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : [nara.afj@gmail.com](mailto:nara.afj@gmail.com) FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町19 マリアテラスビル2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司